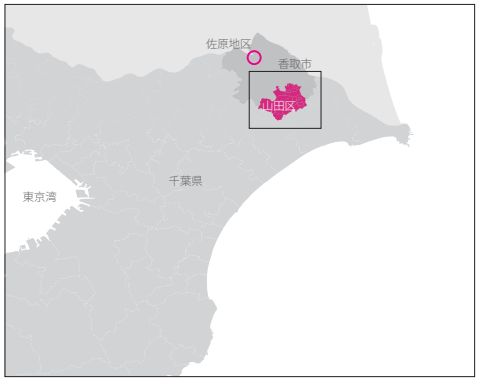
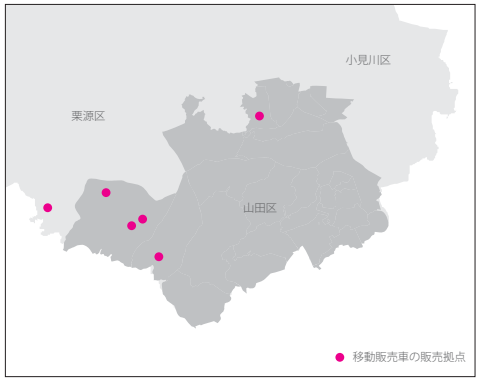
地域住民による移動販売「なかよし」
千葉県香取市山田区

買い物ついでに友達と賑やかに話すお客さん達

集会所での販売の様子

地元の住民が毎週火曜日、地域の６カ所で移動販売をしている。買い物の場所を失った高齢者のために始まったこの取り組み。今では買い物の場以上に、高齢者達の交流の場となっている。





千葉県香取市山田区

成田市の東に位置する千葉県香取市。佐原市、小見川町、山田町、栗源町が 2006 年に合併したことで誕生した。旧山田町である現在の山田区は、地形に富んだ緑豊かな農村地帯である。香取神宮への参拝の経路であり、多くの寺社が存在する。参拝者の来訪により栄えたまちである。

面積・人口

面積：51.54 ㎢
人口：10,751 人、世帯数 3,066 （2008 年 4 月）
人口密度：208.6 人 / ㎢
年齢 3 区分別人口： 0－14 歳 1,259 人（11.7%）
15－64 歳 6,546 人（60.9%）
65 歳以上 2,946 人（27.4%）

産業

香取市北部の佐原区や小見川区は、利根川を利用した舟運により、商都として発展した。佐原区は醸造業も発達し、小江戸と言われる程栄えた。一方、香取市南部の山田区、栗源区は、台地を生かした桑苗栽培と養蚕業が盛んとなった。山田区の山倉地区は、明治後期には県内有数の繭の生産地となった。現在の香取市では、米や芋類、畜産の養豚の生産が主となっているが、全国の都市と同様、高齢化により後継者の問題で悩まされている。近年では、東京からのアクセスの良さを活かして、週末農業の取り組みも見られる。

山田区の田園風景

合併

2006 年の合併により香取市の中心的機能は佐原区に集約されることとなった。合併によりこれからの時代を乗り越えていくための強固な中心ができた一方で、山田区にとっては、中心が離れていったようなものである。それにも関わらず、佐原区へのアクセスは、自動車を持たない者にとっては容易ではない。また、佐原区は観光地としても賑わっており、商店も数多く存在するが、山田区の商店は点在している上に、近年では閉じる店も増えている。

交通

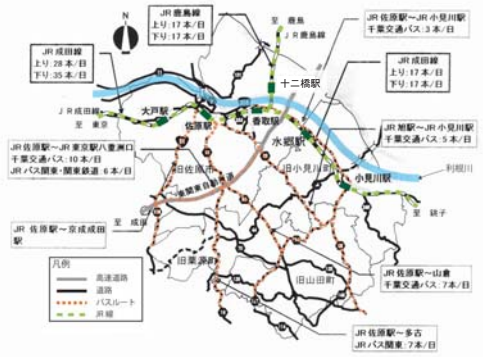
東京駅から高速バスで山田停留所までは１時間半で着く。１時間に１本出ており、東京へのアクセスは比較的良い。

しかしその一方で、佐原区へのバスは１日７本で１路線しかなく、合併後もそれが改善されてはいない。

鉄道は市内北部を利根川沿いに走っているが、山田区、栗源区からのアクセスは悪い。

地域内交通

路線バスは千葉交通の１路線だけである。また、台地や谷津地帯に形成された点在する農村集落を網羅しているわけではなく、公共交通のサービスを受けられるのはわずかな人達だけである。



香取市の公共交通ネットワーク

住民による取り組み

地域の女性 4 人が 6 年前から続ける移動販売。商店が減って来たこと、高齢化が進んだこと、それが重なって、地域で買い物ができない高齢者が増えてしまった。いわゆる買い物難民である。最近になって聞かれるようになった言葉だが、山田地区では 6 年前から問題視されていた。当時の山田町役場の支援事業として始まった移動販売だが、合併により担当者が異動することになり、それを機に行政の介入はなくなってしまった。存続の危機に立たされた移動販売「なかよし」であるが、初期から参加していた住民 4 人が、なんとしても地域の高齢者に商品を届けたいと、自分達で続けることを決心した。

活動している住民 4 人のうち 2 人は山田区で商店を営んでいる。その商店の商品、そして地元農家から仕入れた野菜や果物、花を販売している。残り 2 人はボランティアであるが、商店を経営する人がメンバーにいることで、商品管理、仕入れなどが可能になっている。

移動販売は毎週火曜日、山田区、そして栗源区を含めた 6 カ所を回っている。最初は地域の青年館 (9:30〜)、2 カ所目は神社の駐車場 (10:00〜)、3 カ所目は空き店舗の駐車場 (10:30〜)、4 カ所目は地域の公民館 (11:00〜)、5 カ所目はお寺の駐車場 (11:30〜)、最後は農村集落の集会所 (12:00〜) である。行政と警察の許可をもらい行っている。

各場所に着くとまずスピーカーで音楽を流す。高齢者に人気の氷川きよしの「きよしのズンドコ節」である。それが流れると、おばあちゃん達が歩いてやってくる。場所によっては、早く来て移動販売を待っているおばあちゃん達の姿が見られる。商品は新鮮な野菜や果物はもちろん、魚や肉、卵もある。来る人が皆、買い物難民というわけではなく、家族と暮らしている人もいる。そんな方達に人気なのは、その日のお昼ご飯になるおにぎりや惣菜、おせんべいや飴などの菓子類である。

地域に笑顔を

家族と暮らしており、特別生活に必要なものに困っていない人も、この移動販売にやってくる。なぜだろうか？それは、この移動販売が交流の場となっているからである。この地域において、移動販売が友達と話す貴重な機会となっているのである。「なかよし」は「きよしのズンドコ節」に合わせて、移動販売のアナウンスをしている。その中に「顔を見せてくださるだけでも結構です。」というフレーズがある。「なかよし」のメンバーも、そこが買い物の場以上に、地域の交流の場となることの重要性を認識しているのである。買い物というきっかけにより、交流の場が生まれ得ることを彼女達は強く感じている。「おばあちゃん達の笑顔にこちらが元気づけられている」と彼女達は言う。

また、家族に買い物をお願いできる人でも、実際に自分の目で見て、手に取って商品が選べるということに喜びを感じているようである。選択肢があり、自分で選べる。そんな当たり前のことから、暮らしていることの実感や喜びを得ることができ、笑顔をもたらすのである。

学生の参加

そんな移動販売に、私達学生が参加することになった。とはいっても、実際に販売をするわけではなく、移動販売の “効率”、そして “質” の向上のために何かできないか、と考えた。地域のニーズを捉え、地域に受け入れられている「なかよし」の移動販売。今年度は香取市の地域活性化支援の対象として助成金を得ている。さらに、市の広報誌や、県内の新聞やラジオなどのメディアにも取り上げられるようになった。そんな影響もあり、「うちの地域にも来て欲しい」といった要望が聞かれるようになった。「なかよし」のメンバーも自分たちの活動が受け入れられ、評価されていることを、ありがたく感じているようだが、その一方で、彼女達にとっては現状を維持することで手一杯で、地域を拡大したり、サービスを発展させることは、現実的に難しい。そこで私達は 2 つの取り組みを「なかよし」と協働で始めることにした。

まず 1 つ目は、“効率” の向上である。現在の移動販売では、販売箇所に着くと、組み立て式の商品台を設置し、さらに車から商品を運んで台に並べる。5 分ほどかかる作業であるし、もちろん商品をしまう時も逆の作業がある。6 カ所でこれを繰り返すとなると、時間・労力のロスになることは容易に想像がつく。そこで、車から引き出し展開させることができる商品棚を実験的に制作した。商品は棚に陳列されたまま車に収めることができ、それを引き出すだけですぐに商品棚へと様変わりするのである。まだ試作段階で実用には適していないが、今後改善していくことによって、作業 “効率” が上がるだけでなく、移動店舗としての空間の “質” の向上も同時に期待できる。

もう一つの取り組みが今述べた空間としての “質” の向上である。商品の選びやすさがその 1 つ。それを実現するのが、展開式商品棚である。そしてもう一つが、交流の場としての “質” である。先ほど述べたように、この移動販売は貴重な交流の場となっている。それを最大限活かすための空間というものが必要であろう。そこで手を加えたのが 3 カ所目の空き店舗の駐車場での販売。そこは 6 カ所の中でも一番人が集まる地区である。その空き店舗を開けてもらい、買い物に来た方々が休めたり、話していける場所を作った。店舗に残っていたものを活用しテーブル、机、地域の掲示板、地域の写真の展示スペースなどを創出した。移動販売の到着を待つおばあちゃん、買い物後に友達とおしゃべりをしてから帰るおばあちゃん達に使われている。

課題と展望

地域住民が始めた故に、地域に根付いたサービスが行われている。彼女達は代えの効かない存在になっている。このことは評価するべきと同時に、重く受け止めるべき課題である。後継者は今のところ見当たらず、もし彼女達の体が悪くなってしまった場合は存続できない。それとは逆に、山田区の買い物難民、その予備軍は増える一方である。この取り組みを地域でどう支え、どう持続させていくのか、今後の大きな課題である。

その一方で、住民発でこのような取り組みが継続されているのを考えると、買い物難民、そして地域交流の減少という問題を抱える全国の数多くの都市すべてで、実現可能性がある取り組みとも捉えることができ、1 つの可能性を示してくれている。

ー考察ー

自ら動く、地域を動かす

地域住民が地域のために自ら立ち上がり、地域を変えていく。そんなエネルギーが「なかよし」からは感じられる。「なかよし」のメンバーはそれぞれ、この移動販売の他にも、自分の店の営業はもちろんのこと、小学生の登下校の引率や、地域のお祭りの運営、地域での教室・習い事など、ボランティアで多岐にわたる活動を繰り広げている。まちづくりの担い手なのである。移動販売の様子を見ているとわかることだが、住民が動かしているこの移動販売は、まちづくりにつながる活動なのである。地域での買い物という当たり前の行為を考えることは、地域での暮らしを考えることであり、まちのあり方を考えることである。

他団体との融合

「なかよし」の活動に私達学生が加わった。そのことで少しは活動の幅が広がったのではないだろうか。この移動販売はもはや単なる商売ではなくて、まちづくりに関わってくるものである。そうなった時に、他団体と協働で取り組んでいくことに新たな可能性があると考えられる。まちづくりをフィールドとする学生でもよいし、地域活動を行っている団体でもよい。様々な取り組みがつながっていくことで、地域の将来像を大きく描けるのではないだろうか。その一翼を移動販売が担うのである。

実際、移動販売時に開けられた空き店舗を、小学生向けのワークショップや、お祭りの際の展示・演奏空間として活用している。そのような広がりの中で移動販売を捉えることで、更なる可能性が見えてくるだろう。

データ参照、図引用　香取市　http://www.city.katori.lg.jp/

ずらっと並ぶ商品

地元の大工さんが作った組み立て式台に商品を並べる

試作した展開式商品棚

空き店舗の休憩スペースで団欒するお客さん達

休憩スペース内の写真展示